日本、一世代経って

マウリシオ・ソアレス・ブガリン

「ひと世代」とは何年をさすのか。よく聞く言葉だが、明確な定義付けはないように思える。親の誕生した年からその子らの誕生までの年数の平均値を指すのだろう。そう考えると一世代の長さは時代や国によって違ってくる。私自身の人生を基準にして測ってみると一世代は二四年間に相当する。

私は一九八三年に文部省（当時）の研修生としてはじめて日本を訪れた。そのとき私は二一歳。二年半滞在して一九八六年二月にブラジルに帰国した。一世代たった二〇〇九年の八月に、再度この日のいずる国を訪れた。この小エッセイで、ここころに残る日本文化の二つの側面について述べてみたい。

さまざまな面があるなか、この二つの側面を選んだのは、この二つが性格的に両極をなしているからである。ひとつは変化に関して、もうひとつは永続性についてである。

変わったもの…

一九八四年の七月。日本の蒸し暑い夏。乾燥したブラジリアから来たものにとってはたまらない気候である。私は茨城県の筑波大学に席をおいて都会とは縁のない大学院生活を送っていた。賃貸アパートの狭い一室にはエアコンもついていなかった。だから、少し動いただけで汗が流れ、いつも冷たいシャワーをあびていた。今なら水を大量に無駄遣いしたとしておとがめを受けるかもしれない。しかし八〇年代のことである。一日四、五回シャワーを浴びていた。ある日、国際留学生課が主催しているホームステイ・プログラムに参加しようと思い立ち、申込みをした。日本文化にもっとふれるのが目的である。しかし、なんとホームステイ先は大学から数キロしか離れていない土浦であった。友達には、私が土浦にホームステイに行くことを秘密にしておくことはできなかった。友達にどれほどからかわれたことか。しかし、私はホームステイの経験をちっとも後悔はしていない。私は四人家族―夫婦と愛らしい二人の女の子―と生活をともにした。みんな私に親切にしてくれた。数日間暮らして日本の典型的な家族の生活の仕方について多くを学んだ。

冷たい素麺を食べたのもこのときがはじめてだった。土曜日の夜、子ども達が寝たあと、お父さんが外で飲もうと私を近くの居酒屋に誘った。そこでは美味な冷酒を飲んだ。酒で酔ってか、二人とも段々と饒舌になっていった。私は戦後四〇年たらずで復興をとげ、経済発展を達成した日本はすばらしいとお父さんに語った。

第二次世界大戦が終わって、日本の国土は荒廃し、誇りを失った。それがいまは世界第二位の経済大国になり、安定した民主制を保ち、均一で豊かな社会に変貌した。私の話を聞き終えてお父さんは眼を輝かせ、満面に笑みをたたえ日本のことを自慢し始めた。聞いていて、彼がいかに自分の国と国民を誇りに感じているのかが分かった。

日本人の誇りを感じたのはそのときが初めてだった。しかし、それは唯一の経験ではなかった。その頃はそのような誇りが国の全体に染みわたっていた。国の輝ける将来に対する自信があった。それが人々の生活にも反映されていた。

翻って私の国ブラジル社会を見ると、その当時そのような前向きな姿勢からは縁遠い状態であった。我々は権威主義的な政権から自由を勝ち取ろうと闘っていた若い民主主義国だった。誇りもあったが、なさねばならぬ事が多くあった。インフレーションは制御不能に陥っていたし、人々の間での所得の不平等はかつてないほど高まっていた。高等教育はもちろんのこと、初等教育でさえすべての子供が受けられるわけではなかった。新しい憲法も起草されなければなかなかった。民主的な制度の多くがまだ若く未熟であった。

お父さんの自信をみて私がうれしくなったのはそのような理由があったのかもしれない。国民が将来を確信している国こそが、住むに相応しいすばらしい国なのだと感じた。

二〇一一年一月。その精神は消え去ってしまったように思える。大震災の前でさえ、私の日本人の友人達は自分たちの将来について自信を失っているように見えた。人口は毎年縮小し、モノの生産は一〇年単位で落ち込んでいる。世界第二位の経済大国の地位は中国に奪われた。韓国の企業はハイテク市場において価格、品質、技術革新の面で日本企業としのぎをけずっている。そして原発事故以降、政治家への信頼も失われた。「高齢者

人口が増え、若い世代に過重な負担を負わせるようになって、今後二〇年間我々はどこにむかおうとしているのか。」このような声がここ二、三年の間しばしば聞かれるようになった。

逆説的ではあるが、ブラジルは日本とはまったく逆の位置にあった。世界金融危機の激流を落ち着いて安全に航行し、インフレーションは抑制され、財政状態は年々健全性を増し、国際貿易も他の危機に陥っている国々の経済を支援するためにＩＭＦに資金を貸し付けるほど輸出超過が続いている。ブラジルは世界第六位の経済規模の国となり、世界でもっとも大きな直接民主制の国である。諸制度も整備された。私は一世代前の土曜日の晩に、土浦で飲みながら話し合ったときに初めて経験したノスタルジックな誇りの感情をブラジル人の心にも感じることができるのである。

変わらないもの…

一九八四年の二月。大阪外大で数カ月、日本語会話の講座を受けたあと、私は茨城に戻った。大阪で出会ったアメリカ人の友達ジョアンが自分の研究プロジェクトをつづけるため東京のある大学に勤めることになった。大阪を発つ前、われわれは東京で週末会うことを決めた。若くて世間知らずの私は午後四時に東京駅で会うことを提案した。若い読者は信じないかもしれないが、その当時は、携帯電話は今ほど普及しておらず、大学教授なら誰でも持つような代物ではなかった。いうまでもなくジョアンも私も持っていなかった。それでも心配することはなかった。東京へ行くのは「容易」だった。大学からＪＲの荒川沖まではバスで三〇分、そこから東京までは各駅停車の列車で一時間半。東京に入ってから一度下車したのでもう一度東京駅までの切符を買う必要があった。不幸なことに地図も切符販売機も日本語の表示しかなく、私の漢字の力ははなはだ心許ない。そこで私はちかくの男性に助けを求めた。

その人は、丁寧に道順と料金を教えてくれた。私は彼にお礼を述べ自動販売機に向かって歩いた。すると彼が私の横について歩いているのに気がついた。彼は私が迷ってしまうのではないかと心配になり、私の切符を買ってあげ、東京駅まで連れて行こうと決めたのだった。東京駅は彼の行き先ではないにもかかわらず。その紳士は心配して東京駅のどこで待ち合わせをしたのかと聞いた。私が、とくに特定の場所は決めなかったと彼に言った。すると彼は「駅は非常に大きくホームもたくさんあるんですよ」という。私は彼に一番線まで連れて行ってもらった。果たして、幸いにもジョアンは落ち着いて私を待っていてくれた。その日以来、私は折りにふれ道端で人に尋ねる必要が生じた。そのたび毎に私は、これ以上考えられないほどに丁寧な扱いを受けた。

二〇〇九年の八月。外国人の友達と上野駅からそう遠くないところにあるホテルで会う約束をした。ホテルへのだいたいの道のりは把握していたのであるが、結局のところ近くの商店街で迷ってしまった。時間も遅くなり雨もふりだしたので果物屋の男の人にホテルまでの道をたずねることにした。彼はそのホテルを知らなかったがそこで待つようにと指示し、今度は奥さんと共にもどってきた。奥さんは道順をおしえてくれた。ホテルはすぐそこにあった。我々は婦人に感謝の言葉を述べ、持っていた小さな傘を開いた。彼女は気の毒そうな表情で「傘は一本しかないの？」と聞いた。われわれは近いから大丈夫、と答えた。すると彼女は待つようにいい、新品に近い大きな傘をもってもどってきた。「これはお古で、もう使わないから、持って行って。東京見物を楽しんでね。」

このような日本人の外国人への親切な態度は、日本文化に特有なものであり失われることがない。

どんなに疲れていても、急いでいても常に歩をとめて迷ったガイジンを助けてくれるのである（もっともガイジンが迷うことも減ったが）。世代の隔たりなどとは関わりなく日本人の変わらぬ笑顔と親切に感謝！

Mauricio Soares Bugarin／アジア経済研究所海外客員研究員

Professor of Economics,
University of Brasilia
調査課題：The effect of Inequality on the cost of Electoral Campaigns: A comparative dynamic analysis for Brazil and Japan